

山川港：ネシアの玄関口—その歴史・産業・文化—

長嶋俊介

鹿児島大学多島圏研究センター

Yamakawa Port as a Gateway to Kagoshima-nesia and Ryukyu- its history, production, and culture

NAGASHIMA Shunsuke

Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

要旨：山川は琉球薩摩航路の枢要な天然良港であった。琉球薩摩の歴史遺物のみならず、江戸期の文化・植物伝播、江戸末期の開国に関わる、日本国全体の歴史にとっても重要な場所である。2009年すなわち薩摩による琉球侵攻400周年に際して、山川市民は記念碑を建立し、沖縄の大学・大学生がこの港で、慰霊等の諸活動を行ったが、その痕跡も確認した。またここは全国3大鰹節産地であり、とりわけ最高級のカビ付き本節の最大産地である。その現況と推移も調べた。

Abstract: Yamakawa Port has been a cardinal natural harbor for Ryukyu Kingdom (the present day Okinawa)-Satsuma (now Kagoshima Prefecture) maritime trade route, especially of sugar trade. It has also had indispensable involvement in the Japanese history: the cultural and plantation propagation during Edo Period as well as being involved with pre-reopening ports for foreign trade towards the end of Edo Period. We pursued the review of past 400 years of the Yamakawa Port with preserved Ryukyu-Satsuma historical heritages and relics. One such momento was 400th commemoration of Satsuma domain invasion of Ryukyu. This was hosted at the Port by Yamakawa citizens along with an Okinawan university and their students, and they erected commemorative monuments. The port is also one of the three major production sites for dried bonitos. Notably, it is the place for the production of fungi dried bonitoes, a premium delicacy. We investigated the manufacturing processes and its trends.

1 ネシアの玄関口：山川港

ネシアは大きな島連なりを表す。インドネシア・ミクロネシア・メラネシア・ポリネシア・・・島尾敏雄はヤポネシアを提唱した。山川から見ればさらに南に、琉球ネシアが連続一体として連なっている。近くは薩南諸島の入り口でもある。奄美・薩南・トカラ・三島の島群は、鹿児島ネシアの(甌島・長島・獅子島等を除き)連続一体的枢要地で、山川はその平穏水域：錦江湾入り口の起点である。

山川港は単なる自然良港ではない。中世までは地頭年貢積み出し港であったが、次第にリューキューネシア・ヤポネシアとの繋がりを強め、そこから形成された日本列島全

体の歴史を左右する場所となる。特に近世以降にとって、重要な産業・歴史・文化地域で、しかも多様な結節点としての顔を持つ。

以下現地実査を踏まえて、その価値と現状を整理してみた。主要調査日は風待ち、波待ちの2010年5月18-19日であるが、南星丸利用の度に上陸・実査を重ねている。

2 薩琉交流拠点の今

熊野神社・・薩琉400年遺産

熊野神社〔遺産1〕は、黒潮で紀伊半島と文化的に繋がっていることを証明する信仰拠点であるばかりか、薩摩藩の歴代藩主が崇尊する社寺としても別格の重要性があった。また当神社広場での1609年3月8日「琉球出兵」式は藩主家久自らも参列し盛大であったと記されている。その後、藩主自ら愛宕山頂上から軍船を見送った。



写真1. 琉球侵攻出陣式会場跡地（中庭）

愛宕山・・薩琉400年遺産

愛宕山は、その後も、琉球と薩摩を結ぶ航路を見下ろす場となる。2009年11月29日琉球・山川港交流400周年実行委員会は、その場に、1 mサンゴ石の「琉球人望郷の碑」〔遺産2〕を建て、「往還逝去琉球人望郷の地」と記した陶板を埋め込んだ。展望場所愛宕山に沖縄の方向に向けて立つ。



写真2. 愛宕山琉球人望郷の碑（左）



写真3. 愛宕山からみおろす錦江湾出口水路

福元墓地と旧正龍寺跡墓地・・薩琉400年遺産

福元墓地一角に明治10年代建立の西南の役戦没者招魂塚がある。この碑建立の折、琉球人墓地〔遺産3〕は撤去され、その後不明となっている。「壊されて塚が造成された」と下記交流会作成の碑には記されている。それに代えて、旧正龍寺跡に2009年11月29日琉球人鎮魂墓碑〔遺産4〕を山川港交流委員会が設置した。「江戸時代には琉球から山川港へ、幾度も使臣船が来航した。この間遭難・客死した使官は数百名に上る。・・新たな交流元年に当たり、・・建立する」とある。薩摩藩琉球統治時代1000回近い使節船来航、遭難客死使臣500人という記録もある。

そしてセンター最後の2010年2月14日多島域フォーラム「薩琉400年」報告者琉球大学法文学部豊見山和行教授も引率する琉球大学「江戸立ち」（那覇→名瀬→鹿児島→大阪→東京の各地でシンポジウムを重ねた）巡検の一行も、3月5日、この地を訪れている。



写真4. 交流400周年ポスター



写真5. 琉球人鎮魂墓碑：沖縄風習に倣い紙銭（うちかび）焼器も設けた。



写真6. 琉球大学「江戸立」



写真7. 大城仁屋、天明6年（1786年）琉球墓

旧正龍寺跡墓地・・薩琉400年遺産

正龍寺は名僧を輩出し「薩摩藩文教の府」とも言われてきた。貿易港である山川港外交文書の授受役も担っていたところである。明治2年に廃仏毀釈により廃寺になっている。荒れたままで墓石も雑草に埋もれていた。1978年文化財保護条例により調査が開始され、文化財価値が再認識され指定文化財となった。1987年までに65基が復元した。中に日中両国年号が刻まれた沖縄様式の墓石〔遺産5〕もある。これも沖縄との交流の深さを示している。また朝鮮で没した人の墓はある。海流のなせる業か／交易関係者のものか不明であるが、甌島に琉球墓もあることから、鎖国以前や鎖国中も、頻繁に琉球・朝鮮往来が山川經由九州西岸海路でなされていた可能性を示すものでもあろう。



写真8. 河村覚兵衛墓石群

この墓地には河村覚兵衛墓石群〔遺産6〕もある。伊予水軍（漁業面の愛媛との繋がりが深い）の出で、薩摩藩の南西諸島交易を担う豪商で、歴代当主とその家族の墓である。山川は砂糖を含む物資輸送の廻船業が発達したが、その代表格であった。8代目肖像碑は街中〔遺産7〕にある。訪ねたが、商業を営んでいる実家＝本家の中にあるが店は閉じていた。観光ボランティアに依頼すると見せてもらえるという。「一番、最初に石敢當と書かれたもの」〔遺産8〕が河野家店左隅にあった。火災で赤くなったとされるそのものの色であった。石敢當は中国伝来の、通りの辻道祖神／安全祈願だが、沖縄全域にも普及している。山川は戦後一気に増えたが、少なくとも20基以上は確認できた〔遺産9〕（写真は省略）。

その河野家からの通りは、唐人街（トジンマツ）〔遺産10〕に連なり、中国・沖縄人街をなしていた。河野家他の南西諸島恩義社会的通りの感もある。山川石（火砕流体積物石を利用して黄土色が特有）塀は美しくもある。



写真9. 最初に石敢當と書かれたもの



写真10. 河野家の店

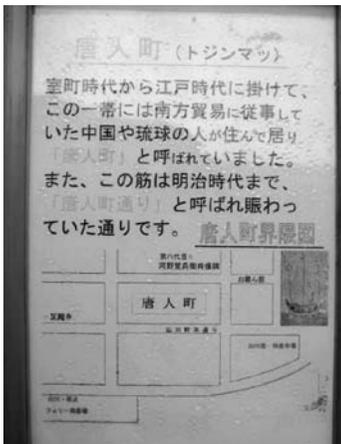


写真11. 唐人町界限看板



写真12. 唐人町看板所在の山川石壁

五人番跡碑・薩琉400年遺産

山川港北JR駅のさらに東に、その入り口があり海岸までおると、琉球人瀬の碑[遺産11] (1978年建立) が海に向かい立っていた。台風で折れたが船舶係留の大木がそこにあったという。いずれも貴重な遺跡である。





写真. 14-17 五人番跡地の碑

3 食用・薬草植物伝来の地

薬草園

本土最南端の亜熱帯突端に位置するので、植物移入や栽培のメッカにもなった。

旧正龍寺跡墓地に、生薬箱刻印 [写真18] のある墓石があった。掲示によると、内田見眞の関与するものと推定している。近くの山川小学校跡（明治から1969年）には、山川薬園跡がある。1659年に設置された藩の薬草研究所である。他には佐田と鹿児島城下吉野に設置された。当時はレイシ／ハズ／キコクが栽培され、今はリュウガンのみが栽培されている。



写真18. 生薬箱刻印のある墓石

サツマイモ上陸地

サツマイモ関係も薩琉関係遺産と言えなくもない。とりあえず独立して記載する。

甘藷・唐芋・琉球藷（りゅうきゅういも）の学名は、*Ipomoea batatas* L.であるが、ヒルガオ科サツマイモ属の植物として扱われている。属名称に薩摩が入っていることは興味深い。

その「サツマイモ」伝来の地としては、沖縄本島と種子島（一部長崎）が歴史遺産的に注目されがちだが、全国で伝播メインルートとして山川・前田の存在意義は再評価されるべきであろう。[写真19] のように港内浦向の浜に「上陸地」柱と看板があった。1705年豪商河野家水夫前田利右衛門が、甘藷種芋を琉球から持ち帰り、栽培を始めた。日本の近世の人口構造、九州のみならず瀬戸内を始めとする離島域の暮らしにも後に直

接的な影響を残すことになる。唐芋との琉球での呼び名が、サツマイモと本土側で呼ばれ出すのもこの伝来地の存在無くして語れない。少し詳しく見ておこう。



写真19. サツマイモ上陸地の柱と看板(サツマイモ遺産1)

周知の通り南米ペルー原産。ニュージーランドへは10世紀頃にマオリ族によって持ち込まれ「クマラ」(kumara)と呼ばれた。イースター他ポリネシアに広く伝わった。その後大航海時代に、東南アジアに導入され、そこから中国を経て沖縄、九州、本州と伝わった。中国(唐)から伝来した沖縄や九州では唐芋(奄美群島では例外的に薩摩芋)、沖縄(琉球)から伝来した北部九州では琉球薯、九州から伝来した本州では薩摩芋と呼ばれている。沖縄ではウム、ンム、伝来当時は蕃薯(はんす)。対馬地方では孝行芋(飢饉から救う孝行物の芋という意味)。丸十と呼ばれる場合もあるが、薩摩藩島津氏の家紋に由来する。朝鮮へは1764年第11回朝鮮通信使の趙薯が、対馬から持ち帰ったとされる。朝鮮語でサツマイモを意味する「コグマ(고구마)」は、「孝行芋」の対馬方言「コーコイモ」、「コーコモ」対馬北部方言の「コグマ」がそのまま伝わったものである。

琉球王国には1604年伝わる。明への進貢船の事務職長野國総管が福建省付近からの帰途、苗を鉢植えにして北谷間切野国村(現在の嘉手納町で、米軍基地の脇、道路添いに碑がある)に持ち帰る。儀間村の地頭・儀間真常が総管から苗を分けてもらい栽培に成功。痩せ地でも育つことから広まった。野國総管は芋大王(うむふうすう)と称えられる人物詳細は不明である。

薩摩へは沖縄侵攻直後1609年尚寧王より、次いで尚貞王より1698年には種子島へ送られ、種子島久基の命により種子島での栽培が始まった。別経路では三浦按針が1615年平戸(長崎県)に持ち帰り九州でも別途栽培が始まった。しかしこれらはむしろ傍系である。

1705年(1709年説もあり)、薩摩山川の前田利右衛門は、船乗りとして琉球を訪れ、甘藷を持ち帰り、近隣に広めて「カライモ」と呼び、やがて薩摩藩全域で栽培されるようになった。利右衛門は民間人として初めてサツマイモの栽培を広めたとされ、「甘藷翁」として地元であがめられ、サツマイモの神様として祭られている。

1732年の享保大飢饉により西日本が大凶作に見舞われ深刻な食料不足に陥る中、長崎県と鹿児島県では餓死者を出さなかったことで、サツマイモの有用性を天下に知らしめることとなった。

八代将軍・徳川吉宗はサツマイモの栽培を関東に広めようと決意し、青木昆陽を起用した。1734年青木昆陽は薩摩藩から甘藷苗を取り寄せ、「薩摩芋」を江戸小石川植物園、下総の幕張村、上総の九十九里浜不動堂村で試験栽培し、1735年栽培を確認。これ以後サツマイモが関東一円に広がる。その後東日本にも広く普及するようになる。島では愛

媛県大三島で1711年にサツマイモを伝えその後の飢饉を救った下見吉十郎を顕彰した「いも地蔵」、隣の広島県大崎上島沖浦の恵比寿神社にある「さつまいもの碑」などがある。

利右衛門は揖宿郡山川郷岡児ヶ水（おかちよがみず）の出身で生家も残っている。一般の住民で武士ではなかったため苗字はなく、その子孫が明治になってから名乗った前田という苗字が遡って「前田利右衛門」という名前が定着している。農民であるとも漁民であるとも言われているが、現在の家跡にも農地があった。



写真20. 利右衛門家の畑 [サツマイモ遺産2]



写真21. 利右衛門の墓：市重要文化財 [同3]

水夫として琉球に渡った際にサツマイモの苗を薩摩に持ち帰った。（琉球出兵将兵が持ち帰ったという説や、種子島の領主が先に栽培していたものが持ち込まれた説もあるが少数説）、しかしその経緯ははっきりとしておらず、利右衛門の死亡年は1707年1709年の両説がある。説明板には海難で没とある。出生年についてもはっきりとしておらず、1670年代と推定されている。

しかしその後の経緯は、神格化されてくる。飢饉時にサツマイモが多くて住民を救ったことなどから、彼の業績が賞賛され、あちこちに業績を顕彰する碑が建てられる。指宿市山川町岡児ヶ水には彼の頌徳碑が建てられ、徳光神社が建立されている。また甘藷翁の称号碑もある。因みに近年では、地元指宿酒造が「利右衛門」という芋焼酎を発売している。



写真23-26. 徳光神社 [サツマイモ遺産4]

左上：鳥居からの風景 右上：顕彰碑 右下：神社 左下：神社入り口右柱下の盆栽風芋苗

4 水産加工基地としての全国区的地位

鰹節加工産地（1910年伊予の製法指導で始まる）としての山川港は有名。清水や枕崎に比肩できる規模で、かつ最高級品（仕上げ節）では全国1の生産量を誇ることを現地加工協同組合に行き確認した。その推移を 抜粋した。現在かび付けのカビは清水から購入しているが、（日本食ブームを受けて）世界的販売拡大が期待される時代（期待したいが）には、カビの自己・地元調達を期待したい。

平成21年度鯉節生産量

(単位：トン)

品 種	山 川		枕 崎		焼 津		合 計	
	数 量	割 合	数 量	割 合	数 量	割 合		
仕上節	本 節	1,099.0	9.0	164.5	1.1	4.7	0.1	1,268.2
	亀 節	76.3	0.6	34.7	0.2	0.0	0.0	111.0
	準仕上節	33.3	0.3	255.0	1.7	0.0	0.0	288.3
	小 計	1,208.6	9.9	454.2	2.9	4.7	0.1	1,667.5
荒節	荒仕上節	327.5	2.7	1,753.7	11.4	352.1	3.5	2,433.3
	荒 節	10,376.8	84.9	10,247.9	66.4	8,213.2	81.0	28,837.9
	小 計	10,704.3	87.6	12,001.6	77.8	8,565.3	81.9	31,271.2
その他	沖 縄 行	31.5	0.3	130.8	0.8	0.0	0.0	162.3
	新さつま節	78.9	0.6	159.5	1.0	0.0	0.0	238.4
	豊 倉 行 他	181.7	1.5	310.2	2.0	433.5	4.3	925.4
	小 計	292.1	2.4	600.5	3.9	433.5	4.3	1,326.1
鯉 節 合 計	12,205.0	99.8	13,056.3	84.6	9,003.5	86.3	34,264.8	
サバ節類	19.2	0.2	2,369.4	15.4	1,137.6	11.2	3,526.2	
生 産 総 計	12,224.2	100	15,425.7	100	10,141.1	97	37,791.0	

1. 原料仕入状況

区 分		平成7年		
		数量	%	
山 川 港	巻 網	鯉	12,019	24.4
		シビ	409	0.8
	巻 網 計	12,428	25.2	
	輸 入	鯉	7,079	14.3
		シビ	397	0.8
	巻 網 計	7,476	15.1	
	小 計	19,904	40.3	
陸上搬入 鯉節向	29,234	59.3		
鯉 節 向 合 計	49,138	99.6		
加工向 雑魚	211	0.4		
合 計	49,349	100.0		

1. 原料仕入状況

区 分		平成13年		平成19年		
		数量	%	数量	%	
山 川 港	巻 網	鯉	18,675	38.9	22,603	44.6
		シビ	1,547	3.2	1,076	2.1
	巻 網 計	20,222	42.1	23,679	46.7	
	輸 入	鯉	16,341	34.0	12,392	24.4
		シビ	763	1.6	908	1.8
	巻 網 計	17,104	35.6	13,300	26.2	
	小 計	37,326	77.7	36,979	72.9	
陸上搬入 鯉節向	10,696	22.2	13,625	26.9		
鯉 節 向 合 計	48,022	99.9	50,604	99.8		
加工向 雑魚	66	0.1	117	0.2		
合 計	48,088	100	50,721	100		

2. 生産状況

品 種		平成7年	
		数量	%
仕上節	本 節	814	8.3
	亀 節	91	0.9
	小 計	904	9.2
荒 節	荒 仕上節	591	6.1
	荒 節	7,523	77.1
	小 計	3,114	83.2
その他	沖 縄 行	326	3.3
	新さつま節	58	0.6
	田舎行その他	308	3.2
	小 計	692	7.1
鱈 節 類 合 計		9,710.8	99.5
サバ節類合計		48.6	0.5
生 産 総 計		9,759.4	100.0

2. 生産状況

品 種		平成13年		平成19年	
		数量	%	数量	%
仕上節	本 節	1,148.0	12.1	1,024.2	10.2
	亀 節	108.8	1.2	88.7	0.9
	準仕上節	-	-	37.2	0.4
	小 計	1,256.8	13.3	1,150.1	11.5
荒 節	荒 仕上節	299.3	3.2	268.3	2.7
	荒 節	7,292.2	77.1	8,193.6	81.9
	小 計	7,591.5	80.3	8,461.9	84.6
その他	沖 縄 行	342.8	3.6	33.9	0.3
	新さつま節	77.1	0.8	67.1	0.7
	田舎行その他	168.3	1.8	258.4	2.6
	小 計	588.2	6.2	359.4	3.6
鱈 節 類 合 計		9,436.5	99.8	9,971.4	99.7
サバ節類合計		15.2	0.2	27.0	0.3
生 産 総 計		9,451.7	100	9,998.4	100

また販売店には農林大臣賞表彰を見かけたが、近年カビ付きも対象になった。ほぼ山川に限定されるので受賞確率も高いと組合で聞いた。その店に山川音頭歌詞があり、販売店の女性本人が替え歌で歌ったテープも聞かせてくれた。踊りにも取り組んでいる。



写真27. 農林大臣賞／山川音頭の女店長



写真28. 同息子による工場での説明



写真29. 成形作業（男性ベテランもいた）



写真30. 最高級かび付きの完成品

5 「海外」文化／人の入り口

鎖国から開国に至る時代にも、実力藩薩摩の入口、本土最南端の自然の良港として、山川はいろいろな人物が通過した地点になる。海外からも要人も通過した。1546年ポルトガル人アルバレスが山川に滞在。西欧人日本発見の書「日本報告」に印象を記す。同じころ1549年8月フランシスコ・ザビエルが上陸し、手漕ぎ船で鹿児島へむかった。

幕末になると国防の前線となる。1837年天保8年7月10日米国船モリソン号に向かって、異国船打払令に従い、砲撃を加える。また1858年には咸臨丸そして勝海舟も入港している。

まさにこのころ、琉球関係者が逗留し・薩摩藩が警備に力を入れ、黒砂糖専売の交易商がいて、文物情報人材が通過する場拠点としてにぎわっていたことになる。

6 観光・エコ資源と山川地区・まとめに代えて

文化財としての山川石壁は、鮮烈な印象がある。通り随処に延々と存在する。墓石や灯籠も独特の黄土色ですぐにわかる存在感である。山川石は元々火砕流堆積物で、個性ある素材でもある。それを見ながら歩く散歩・観光コースも設定されている。

また、温泉火山地域としての景勝地・保養地も周辺に多い。山川は昔山河とも記載されていた。険峻な鹿児島の地形を象徴する名前でもある。亜熱帯植物の自然群生北限地（蘇鉄など）も魅力である。地熱発電所はわが国ではまだ珍しいが、直接間近の平地部で見られる。

竜宮神社・長崎鼻も一大観光地で人が多く尋ねる。珊瑚美しい、浦島・音姫伝説の地は「恋人の聖地」的人気である。貝に思いを書きこみ、甕に入れる。

これらは、上記の史跡・文化財・産業活動理解等と重ねられるとき、複合的価値を発揮する。近年この地でもガイド制度が始まったが、それらの現地総合説明装置（ソフト）の充実に期待したい。



写真31. 竜宮神社鳥居から見た開間岳（薩摩富士）